

盛岡市内各高等女學校上級生の月經 に關する統計的觀察

金澤醫科大學理學的診療學教室(主任 平松教授)

盛岡病院婦人科 專攻生 五日市 信

Makoto Itsukaichi

岩手醫大 學生 川名林 治

Rinji Kawana

(昭和24年4月26日受附)

緒 言

一般婦人並に女學生の月經に關する統計的觀察は全國につき或は地方につき幾多先輩により報告されて居るが、盛岡に於ては未だ斯の如き

業績あるを見ない。そこで余等は盛岡市内各高等女學校上級生の月經に關する統計的觀察を行つた次第である。

第1章 調査材料並に方法

盛岡市内に存する岩手、東北、第一、盛岡の四高等女學校の衛生擔任者と連絡し、その4、5年生に一定の調査用紙を配布し、所要事項を記入せしむる方式に

より調査した。調査人員は前記四高女の昭和3年7月以降同7年7月迄に出生せる生徒にして、確實なる解答を得たる1084名についてある。

第2章 調査成績

調査人員1084名中未だ月經の發現せざる者は56名である。

第1節 月經初潮年齢

(第1表及び第2表)

余等の初潮年齢に關する調査人員は總數1028名である。そのうち第1表に示せる如く、最低年齢満10歳7月～11歳0月(1名)、最高年齢19歳1月～19歳6月(1名)にして、満13歳1月より満16歳6月迄に初潮發現せる者は89.81%の大多數にして、就中年齡別に最多數を占むるは満15歳1月～15年6月迄の18.1%である。而して平均年齢は次の如くである。即ち算術平均(M)=14年9.96月、標準偏差(σ)=±13.45月、平均誤差(m)=±0.42月、例數(n)=1028名である。

初潮年齢別頻度 (第1表)

年 齡	人 員	百分率
10年7月～11月0月	1	0.1%
11.1～11.6	3	0.3
11.7～12.0	8	0.8
12.1～12.6	11	1.1
12.7～13.0	30	2.9
13.1～13.6	68	6.6
13.7～14.0	102	9.9
14.1～14.6	162	15.8
14.7～15.0	169	16.4
15.1～15.6	186	18.1
15.7～16.0	138	13.4
16.1～16.6	99	9.6
16.7～17.0	36	3.5
17.1～17.6	11	1.1
17.7～18.0	1	0.1
18.1～18.6	2	0.2
18.7～19.0	0	0.0
19.1～19.6	1	0.1

n=1,028

γ =±13.45月

M=14.9.96月

m=±0.42月

日本人女學生初潮平均年齢 (第2表A)

報告者	調査地	平均年齢	標準偏差	平均誤差	例 数
		(M)	(σ)	(PE, m)	n
小畑	東京	14.25	±11.7m	±0.2m	1,532
辻	全日本	14.j 3.23m	±11.181	±0.108	10,600
五日市・川名	盛岡	14.j 9.96m	±13.45	±0.42	1,028

日本人女學生初潮年齢 (第2表B)

報告者	年代	調査地	例 数	平均年齢
高田	明治37年	東京	277	16歳6月
浅坂	明治43年	新潟	263	14.2
岡島	大正11年	九州	699	14.3
辻	大正13年	九州	278	14.5
施	昭和2年	大阪	822	14.5.5
松山	昭和4年	近畿	692	14.4
松山	"	全日本	3,475	14.2
黄	昭和8年	臺灣	1,531	14.1 強
磯部等	昭和12年	札幌	1,273	14.1
犬丸	"	安東	200	14.1 強
向井	昭和13年	大連	792	14.

第2節 季節と初潮の関係(第3表)

調査人員 1028 名中主位は1月の117名(11.3%), 次で4月 112名(10.9%), 8月の108名

第 3 表
初潮月別頻度

月	人 員	百分率
1	117	11.3
2	43	4.2
3	86	8.4
4	112	10.9
5	83	8.1
6	78	7.7
7	59	5.8
8	108	10.5
9	74	7.3
10	88	8.6
11	83	8.1
12	97	9.5

n=1,028

(10.5%)にして以下12, 10, 3, 5, 11, 6, 9, 7, 2月の順に減少する。

第3節 月経整否並に月経型(第4表)

解答者 1028 名中, 比較的整調なりと言ふ者(整調なる者, 正しいが時に多少遅れ又は早くなる者を含めて)は590名であり, 30日型は41.0%, 28日型は30.2%で最も多い。

月経周期型頻度 (第4表)

周期型	人 員	百分率
30	242	41.0%
28	178	30.2
29	32	5.4
35	28	4.7
25	24	4.2
27	23	4.0
26	22	3.7
40	16	2.7
31	16	2.7
32	14	2.4
24	10	1.7
45	5	0.8
33	5	0.8
23	5	0.8
36	4	0.7
20	2	0.3
21	2	0.3
38	2	0.3
34	1	0.1

n=590.

第4節 月経持続(第5表)

解答者 834 名中最短1日(4名), 最長12日(1名)あるも4日間241名(28.9%), 3日間235名(28.2%), 5日間173名(20.7%)で3~7日

間に終る者が全例の 84.29% を占めてゐる。

算術平均は 4.38 日、標準偏差は ±1.108 日、平均誤差は ±0.383 である。

月 經 持 續 (第 5 表)

日 數	人 員	百分率
1	4	0.5%
2	17	2.0
3	235	28.2
4	241	28.9
5	173	20.7
6	86	10.3
7	68	8.1
8	4	0.5
9	3	3.6
10	2	2.4
11	0	0.0
12	1	0.1

n=834名 M=4.38日
 $\gamma = \pm 1.108$ $m = \pm 0.383$

第 5 節 月 經 量

月經量は個人的に可成の差異あり、且又個人の生活環境により何等かの影響を被るべきこと及び毎月經量の多少に關する判断は、各個人の主觀的判断による爲必ずしも的確ならざるものも有り得ると推定されるも第 6 表の如くである。

月 經 量 n=851名 (第 6 表)

月經量	多 量	中等量	少 量	不 定
人 員	61	545	107	138
百分率	7.2%	64.1%	12.5%	16.2%

第 6 節 月 經 障 碍

余等の調査成績は 1028 名中、多少なりとも障碍を訴へた者は 777 名 (75.58%) である。之等は調査方法竝に個人の主觀の相違により、又個人の精神的肉體的状態に影響される事も考へられるが、月經前、月經中及び月經後の夫々に於ける障碍は第 7 表に於ける如くである。

月經前には下腹痛を訴へる者が最も多く、次

で下腹部緊張感、白帶下、頭重・頭痛、憂鬱等が多い。月經中に於ては憂鬱を第 1 位とし、次で全身倦怠、下腹痛、短氣、下腹部緊張感を訴へる者が多い。月經後は障碍を訴へる者は少くなり、むしろ爽快を覺える者が多い。而して全般的に高度の月經障碍を訴へる者は極めて少い。

月經障碍の症狀及び頻度 (第 7 表)

症 狀	月經前期	月 經 中	月經後期
下腹部緊張	133 13.0%	96 9.4%	5 0.5%
下 腹 痛	350 34.0	174 15.9	10 1.0
腰 痛	77 7.5	75 7.2	5 0.5
尿 意 頻 數	27 2.6	36 3.5	1 0.1
全身倦怠	87 8.4	276 26.8	17 1.6
頭痛・頭重	97 9.5	91 8.9	5 0.5
動 悸	11 1.1	7 0.6	5 0.5
憂 鬱	95 9.3	295 28.6	11 1.1
爽 快	3 0.3	3 2.9	55 5.3
食慾減退	11 1.1	40 3.8	0 0
乳房緊張感	67 6.5	31 3.0	3 0.3
便 祕	24 2.3	37 3.5	6 0.6
下 痢	37 3.5	48 4.6	7 0.6
發 疹	2 0.2	0 0	1 0.1
發 熱	10 1.0	10 1.0	0 0
睡 眠 感	32 3.1	73 8.1	4 0.4
め ま ひ	22 2.1	27 2.6	2 0.2
嘔氣・嘔吐	5 0.5	6 0.6	0 0
短 氣	49 4.7	137 13.3	5 0.5
鼻 出 血	25 2.4	12 1.1	5 0.5
白 帶 下	112 10.8	13 1.2	71 1.6
腰部緊張感	28 2.1	28 2.1	0 0

n=777人

第 7 節 月經に對する豫備知識 (第 8 表)

この間に對し解答されたもの 940 名中、初經來潮時豫備知識有りとなふ者 761 名 (80.9%)、

初潮來潮時の月經に對する豫備知識 (第 8 表)

豫備知識	有	無
人 員	761	179
百分率	80.9%	19.1%

n=940

無しと云ふ者 179 名 (19.1%) である。
 一般に若年にして來潮を見たる者は豫備知識

を缺く者が多い。豫備知識の無い爲、初經來潮時非常に驚愕したと訴へて居る者も少くない。

第3章 總括竝に考案

本邦女學生の月經に關しては多數の報告がある。古くは高田 (明治37)、伊坂 (明治43) 等あり、爾來地方別に或は全日本女學生に於ける松山の如き多數あるが、尙進んで統計學的に調査報告せるは小畑、辻、岩田・根本等を始め多數ある。従つて諸家により標準として示されたる初潮年齢は甚だ多い。余等の統計によると盛岡女學生の初潮年齢は $M=14$ 年 9.96 月、 $\sigma=\pm 13.45$ 月、 $m=0.42$ 月にして東京及び本邦女學生の初潮平均年齢に比し數ヶ月遅い。これは盛岡の氣候風土、生活環境、食生活或は文化の關係を始め多數の因子に原因するものと考へられる。勿論個人的な遺傳關係、既往症との關係、又學業、運動、休暇、戦争、冬期の屋内生活等々も多角的に考慮せねばならぬと思ふ。

由來季節による氣温及び自然風致の變動は婦人の初經に或る程度の影響を及ぼす事は既に一般の認むる所である。文獻によれば本邦女學生の初經來潮の月別頻度が 8、4、1 月に多いのはその特徴とされてゐる。余等の統計も 1 月の 117 名 (11.3%)、4 月の 112 名 (10.9%)、8 月の 108 名 (10.5%) が最も多く殆ど一致してゐる。

女學生の初潮發現は學業中にあり、學業、運動、休暇、試験等による時期的精神状態の反映及び身體的影響等を受くる事の大なるに依るものと推定される。即ち 1 月は新年及び冬休みであつて愉快なる精神状態にあり、4 月は休暇又

陽炎の候であり、8 月は暑中休暇及び炎暑の候にあり、之等が來潮を促進せしむるに力ありと考へられる。反之 2 月、6 月、7 月及び 9 月、10 月、11 月等に比較的少いのは、夫々寒冷、梅雨、寂寥の秋竝に學期末試験等による精神緊張も少からぬ影響を與へてゐるものと思ふ。

從來の報告によれば女學生の月經は不規則なるもの少く、周期は 30 日型が最も多いとされてゐる。余等の統計に於ても 30 日型 41.0%、28 日型 30.2% が最も多く殆ど一致してゐる。月經持續日數は、一般に 3~7 日なる事は從來の統計の示すところである。余等の統計に於ても 3~7 日間に終る者が全例の 84.29% を占めてゐる。 $M=4.38$ 日、 $\sigma=\pm 1.108$ 日 $m=0.383$ である。

女學生の月經隨伴症狀を從來の文獻によると、障碍を訴へる者、松山 38.09%、石川 48.39%、施 56.33%、岩田・根本 56.6%、磯部・鈴木 78.77% 等にして一定しない。余等の統計は人員 1028 名中多少なりとも障碍を訴へた者は 777 名 (75.58%) である。而して全般的に高度の月經障碍を訴へる者は極めて少い。

初經來潮時豫備知識の有る者 80.9%、無い者 19.1% である。一般に若年にして來潮を見たる者は豫備知識を缺く者が多い。豫備知識の無い爲初經來潮時非常に驚愕せる者も少からず認められたが、之等については性教育の向ふべき一つの方向を示唆するものである。

第4章 結 論

余等は盛岡市内 4 高女上級生 1084 名につき月經を調査し次の如き結果を得た。

(1) 未だ發現せざる者 56 名あり、既に月經を見たる者は 1028 名である。

(2) 初潮平均年齢は $M=14$ 年 9.96 月、 $\sigma=13.45$ 月、 $m=\pm 0.42$ 月、 $n=1028$ 人で全日本の

平均より約 6 ヶ月遅い。

(3) 月經初潮の月別に於ては 1 月、4 月、8 月に於て多く見られる。

(4) 月經周期は 30 日型 41.0%、28 日型 30.2% で、その大多數を占める。

(5) 月經持續日數は 3~7 日間の者が 84.29

%であり、その平均値は $M=4.38$ 日 $\sigma=\pm 1.108$
 $m=\pm 0.383$ である。

(6) 月經量は中等量と訴ふる者 64.1%、少量 12.5%、多量 7.2%、不定 16.2%である。

(7) 月經障碍は、多少なりとも訴へた者 75.5%である。月經前は下腹痛、下腹緊張感、白帶下、憂鬱、全身倦怠を訴へる者多く、月經中は憂鬱、全身倦怠、下腹痛、短氣、下腹緊張感

を訴へる者多く、月經後は爽快を覺える者壓倒的に多い。

(8) 初經來潮時豫備知識を有してゐた者は 80.9%、無かつた者は 19.1%であり、若年にして初經來潮せる者ほど豫備知識の缺けてゐた者が多い。

(擧筆するにあたり御校閱を賜りたる恩師平松教授に深甚の謝意を表す。)

主 要 文 獻

1) 高新石次: 日本學校衛生, 21卷, 7號, 454, (昭, 8, 7.) 2) 伊致旺: 朝鮮醫報, 2卷, 2號, 48, (昭, 7, 4.) 3) 長谷川等: 臨床日本醫學, 2卷, 2號, 231, (昭, 8, 2.) 4) 岩田・根本: 第4回體育研究會會誌, 116, (昭, 8, 2.) 5) 庄司忠: 臺灣醫學會雜誌, 32卷, 5號, 701, (昭, 8, 5.) 6) 黃滄浪: 臺灣醫學會雜誌, 32卷, 6號, 788, (昭, 8, 6.) 7) 桧木・合坂: 近畿婦人科學會雜誌, 16卷, 3號, 690, (昭, 8, 5.) 8) 辻俊明: 熊本醫學會雜誌, 6

卷, 12號, 1370, (昭, 5, 12.) 9) 辻俊明: 日本婦人科學會雜誌, 29卷, 9號, 843, (昭, 5, 9.) 10) 緒方英俊: 鹿兒島醫學雜誌, 第60號, (昭, 4, 5.) 11) 田口熊雄: 日本婦人科學會雜誌, 23卷, 5號, (昭, 3, 5.) 12) 施江南: 近畿婦人科學會雜誌, 10卷, 3號, (昭, 2, 6.) 13) 犬丸春美: 內分泌及實驗治療, 5卷, 5號, 838, (昭, 12, 6.) 14) 磯部等: 日本婦人科學會札幌地方部會會報, 8年, 2號, 293, (昭, 12, 12.)